

半農半アート通信

持続可能な農村とアートを考える。半農半アート研究会公式ニューズレター



小森耕太さん



武田力さん



羽原康恵さん



山羊さん

第1回研究会の テーマは、 地域との距離感

8月24日、1回目の研究会をオンラインで開催しました。登壇者は小森耕太さん（福岡県八女市黒木町、認定NPO法人山村塾理事長）羽原康恵さん（NPO法人取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長）。聞き手は武田力さん（演出家・民俗芸能アーカイバー）加えて、主催者側より朝廣和夫准教授（緑地保全学）、長津結一郎助教（アートマネジメント）も助言者として加わりました。ごくごくダイジェストになりますが、印象的だったスピーカーの発言を拾ってみたいと思います。

.....
廃校活用の交流施設「えがおの森」を拠点に、地域の農林家と連携し、里山保全活動、都市農山村交流活動を企画運営する小森耕太さんから。

アートが地域を掘り起こす

「地域の人たちは自分たちが思っている以上に集落に行き交う人のこと

をよく見ている。おい小森、お前昨日あそこで何しよったとか？とか。だから無理やり接点を作って仲良くなるうとしなくても、時間をかけることで関わってくれるようになる」

地域活性化とか地域づくりの専門家が「地域で困ってることはなんですか」とか「人口減って寂しいですよね」って言ってもピンとこない人たちは多いけれど、アーティストやボランティアに来たよそ者の「ここを知りたい」という素直な気持ちによって地域の人々の記憶や意識、今まで誰も見向きもしなかった情報や出来事が掘り起こされてくる。」

.....
茨城県取手市で半農半芸をテーマに「取手アートプロジェクト」を展開する羽原康恵さんから。

個人が素でいられる場を。

「2011年の東日本大震災以降、「アートのある団地」、「半農半芸」という、郊外都市だからこそやるべきアートプロジェクトに移行し、いろんな方が居合わせられるような場を作る取り組みを続けてきました。

新興住宅地にびったり接した高須地区でスタッフがいろんなおばあちゃんの家でご飯を食べさせてもらい、仲良くなった結果、「高須の〇〇さん」ではなくて、一個人の人として、プロジェクトに参加してくれています。自治会として発言するとか、防災会として発言するみたいなことじゃない、個人が素でいられる、自分を出せる場所を作ることが、（アートで地域を）“かき混ぜる”こと。その結果今までなかった人の関係ができる。」

.....
山村塾・九州大学ソーシャルアトラポとともに奥八女芸農ワークキャンプで活動してきた武田力さんから。

化学反応をどう起こすか

「アーティストの役割は化学反応をどう起こすのかということ。何かと何かを掛け合わせると、その地域になかったようなことが起こる。それは毒にも薬にもなるのではないかと思います。だからこそ、間に入るアートコーディネーターという役割も、とても大事だと思って思います。」

第2回半農半アート研究会「アーティストからみる半農半アート」

2021年10月25日（月）19：00～20：30 会場：オンライン（ZOOM）対象者：里山保全や半農半アートに興味関心がある方
事前申込制。右記のURLにアクセスし、申込事項に記入をお願いします。https://www.subscribepage.com/study-group_2nd
詳しくは、九州大学社会包摂デザインイニシアティブHpにて https://www.didi.design.kyushu-u.ac.jp/hannohanartkenkyukai-2/

アート(とその関係者)と地域との距離感

研究会後のアンケートに寄せられた参加者の声を紹介します。

「農」を「ケア」に 言い換えると…

現在、医療福祉現場と隣り合う現場でアーティスト滞在企画やイベント企画を行っています。特に羽原さんの「農と芸の関係をもっとストイックに考えていく」「文化として農を扱っている」といった姿勢は、「農」を「ケア」に言い換えればそのまま自分の活動の指針にできそうだと感じました。
(アートマネジメント関係者)

大学は農とアートの 蝶板のようなもの？

「大学」のもつ役割に興味を持ちました。農とアートの蝶番のような感じなのでしょうか？研究や教育の立場などからも是非お話を聞きたいと思いました。
(アーティスト)

その人が信頼できる 人かどうか

田舎の人たちにとって、何より大事なのは、その芸術活動を理解することよりも、その人が信頼できるかどうか、自分たちの静謐な生活を脅かさないかどうか、なのかなと思った。
(教員)

都市部との比較も

田舎の人たちにとって、何より大事な「半農」ではなく、下町×アート、ドヤ街×アートの試みは都市部でありますよね。その比較をすると面白いかも。なぜ「農」なのかがいっそう明確になるのでは？
(大学教員)

ツールとしてのアート というよりやっぱり人

アーティストと地域との関係に注目しています。そこがうまく関わるためにはコーディネーターを育てることも必要ですね。国内外の半農半アート活動を行っている個人、団体とのネットワークづくりもめざしていきましょう。
(大学教員)

地域を まず知ること

地域の伝統・郷土のことをまず知ること、なぜ私たちは取り組むのか話し合い、ハードル低く楽しく参加できるものを企画思案中。
(行政職員)

地域との距離感については もっともっと深まる話題

もう一度話したいと思った
(NPO職員)

地元では 活動しにくい…。

自分が生まれ育った地元で活動するのは、結構やりにくい。そんな同士はいないでしょうか。地元以外の土地で、専門家という立場があったほうが、地方では受け入れられやすい。自分が本当に豊かに暮らしたい地元では活動しにくいので、結局外に逃げる形になってしまっている(仕事できる場も外にあるので、なのですが)のが、自分としてはもどかしいです。
(大学教員)

半農半アートは 子育てみたい

研究会中のブレイクアウトルームの語り合いで「生活そのものが表現だね」と話をする中で、子育てはとても創造的であると言われた方がいました。研究会の中でも「半農半アートの活動は、子育てみたいです」と言われていたことが印象に残っています。まさに今後の私が求める環境です。
(劇作家)

思考の偏りを 解消する

都市近郊において、都市的な思考を持つ農山村住民(貨幣経済重視)、農山村的な思考を持つ都市住民(暮らし・コミュニティ重視)がいることに活動を通して気づきました。それらの思考の偏りを解消することに、農やアートによる交流は可能性があるのではと感じました。
(研究者)

気がつけば 半農半アート

「気がつけば半農半アート」的な感じで、多様な人々が包摂され、融和していた」という活動がまだまだあるように思いました。ここでは地域との距離感も、せめぎ合いながら臨機応変に伸びたり縮んだりなのかも
(フリーライター)

半農半アート研究会とは…

九州大学大学院芸術工学研究院附属社会包摂デザイン・イニシアティブ内、ソーシャルアトラボが主催する研究会です。「半農半アート」のライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりや農業ボランティアの新しい仕組みモデルについて考えます。年度末にはフォーラムの開催も予定しています。

国内外の半農半アート活動を行っている個人・団体のネットワークを広げ、これからの農村社会の豊かなあり方を提案することを目指しています。研究会では、毎回テーマを決めて、半農半アートのライフスタイルについてキーノートスピーチを聞き、参加者同士でディスカッションを行うことで内容について深めていきます。興味あるみなさんの参加をお待ちしています。



九州大学 社会包摂
デザイン・イニシアティブ
についてはこちら